

第2節 小学校時代

1. 小学一年生—秩父町立第一小学校に入学—

秩父町立第一小学校に入学した。担任は佐藤先生という若い女の先生だった。私は佐藤先生が大好きだった。中肉中背でパンタロンとスカートが一緒になたようなスタイルで、校庭を走り回っているようすを思い出す。私の隣の席は東京から疎開してきた岩崎さんというかわいい女の子だった。席を決めるときに佐藤先生が私の心の中を見透かしたように「小菅君は佐藤さんの隣の席に着きなさい」といった。喜び勇んで私は佐藤さんの隣の席についた。佐藤さんが、「隣ではいやだ」と言ったが、私が「意地悪はしない」といったら、それきりいやとは言わずに仲良くなった。

兄の章雄が近所から家の軒の高さくらいの竹をもらってきて、七夕飾りを作った。当時の夜空は星がたくさん見えた。天の川が、けむりをたなびかせるように流れていた。冬の暗く寒い夜に銭湯に行った帰り道に星空をよく眺めた。秩父の夜は寒い。銭湯の帰りに手ぬぐいをぶら下げて歩いていると、手ぬぐいが凍りつく。上と下を反対にして立てると、ピンと立った。そんな寒い夜空にも、天の川が白いけむりのように流れていた。小学1年で器楽コンクールに出場した。私は鉄琴を担当した。学校の鉄琴は、穴の開いたパイプに糸を通して連ねたものだった。大会当日に指導していた大村先生のお宅で、事故があって、ステージに立つ前に大村先生が帰ってしまった。別の先生が指揮をしたので、入賞できなかったが、鉄琴を担当できた経験は、後の私にとっては大きな出来事となった。宮前書店という本や学用品を扱っている大きなお店があって、父と一緒にいったら、鉄琴があった。私はその場を動けなくなった。怖くて、なじめなくて、あまり私の言うことを聞いてくれない父が、このときばかりは、その場で鉄琴を買ってくれた。うれしかった。この鉄琴でいろいろな歌がたたけるようになった。この鉄琴は、私が成人するまで大切に家にあった。野坂の家に移ってしばらくしてから、裏の家の女の子が欲しがったので、あげるまで大切にしていた。

 終戦は昭和20(1945)年8月15日、私が入学したのが昭和22年4月で、戦後の教育を受けた第1号になった。国語の教科書の最初に「おはなをかざる みんないいこ きれいなことば みんないいこ」とあった。算数の足し算はすらすらとできたが、引き算でつまずいてしまった。姉が必死になって引き算を教えてくれたので、理解はできたが、何故こんなことをしなければいけないのか、何故こんなにたくさん、はてしもなく引き算をやらなければいけないのかと感じて、引き算が嫌いになった。

2. 小学2年生

小学2年の担任の先生は、宇井先生であった。叱るときにアゴに梅干しをつくる。宇井先生は母の友達で、母は久雄が生まれるので学校を退職したが、宇井先生はご主人をなくしたので、まだ勤めていた。食糧難はまだ続いていた。じゃがいもができる頃は、三食じゃがいも、さつまいもができる頃は三食ともさつまいもであった。食べ始めの頃は美味しい。でも毎食、朝昼晩と毎日毎日同じものを食べ続けると、あきてくる。うどん粉でつくるパンがあった。なかに何も入っていない、うどんこ重曹だけでつくる5cmの厚みがある、焦げ目がついたパンだ。やはり初めは美味しいが、食べ続けると飽きてくる。朝パンで学校のお昼もこのパンで、夕食もこのパンだ。

ある日の学校でのお昼もこのパンであった。私が食べていると、友達がじっと見ていた。その友達は食べ物を何も持ってきていなかった。私はもう食べたし、一つ残っていたが食べたくて食べているわけでない。その友達にあげた。その日の放課後に学芸会の練習をしていた。担任の宇井先生がニコニコと入ってきた。指導していた先生に「小菅くんはいる?」と聞いた。私を見つけると、アゴに梅干しをつくった。なぜお昼を友達にあげたのか。大切



小学校の入学式

な食べ物を友達にあげてはいけないと、梅干しをつくった怖い顔で私はにらまれた。私は泣いてしまった。家で母にも叱られた。

雨降り

雨が降って、壊れたこうもり傘しか家にはなかった。根っからのおしゃれだった私は、骨が折れた傘で学校に行くのがいやだった。泣いて嫌がる私に父が怒って追いかけてきた。雨が降りしきる中を、私は夢中になって走って逃げた。父が壊れた傘を持って追いかけてくる。当時はどこも道幅が1.5m位しかない。その道を私が急に駆け曲がると、父は曲がりきれずに7m位走りすぎた。結局は捕まえられて、壊れた傘で学校へ行かされた。捕まって泣き叫ぶ私を見ながら、父は苦笑しながら、すばしっこい奴だと母に話していた。

3. 小学3年生

わがまま

小学3年の担任の先生は小泉先生という若い女の先生だった。透明の縁のメガネをかけて、清潔なメージの先生で、やさしかった。この頃になって私は自我意識がでてきた。わがままになった。女の子とよく遊び、男の子と遊んだ記憶がほとんどない。女の子の名前は覚えているが、男の子は顔も名前も記憶にない。勉強が終わった後に反省会があった。その日であったことで、いけないことを発表するのだ。そこで、わたしは女の子達から集中砲火をあびた。特にいけないことをしたわけでもないが、わがままだった。日中は女の子達はわたしのわがままを許している。でも、反省会になると集中砲火をあびせてくる。私が言ったこと、やったことを逐一、事細かに言い立てる。担任の小泉先生が、そんなにいけないことなの、それ程でもないんじゃないのと言っても、女の子達は引き下がらなかった。重箱の隅を楊枝でほじるように言い立てられた。当の私は、言われることはいやでも、反省会が終わればもう平気で、女の子を敬遠するわけでもなく、またいつもと同じように遊んでいた。女の子達も私を避けるでもなく、遊んでいた。だから、取り立てて意地悪をしたり、悪いことをしたわけでもなかったのだろう。私は小学3年の三学期に秩父町立秩父第二小学校に転校した。

おひな様

私のおひな様は、ガラス箱に入った神武天皇が一つである。兄のおひな様は、最上段にたくさんのおひな人形がならぶ立派なおひな様だ。兄のおひな様がうらやましかった。なぜ私のおひな様は、神武天皇一つだけなのかと母に言っても「一つあればいいだろう」と言われておしまいだった。

川瀬祭り

秩父の町は真夏になると「川瀬祭り」という子供の祭りでにぎわう。中村の家の近くの表通りは、秩父神社を出発した何台もの山車が、荒川に向かっていく通り道だった。山車の通る様子は勇壮だった。秩父屋台囃子が打ち鳴らされて通っていく山車は、心が躍る光景であるが、中村には、川瀬祭りも冬の夜祭りの山車も持っていなかった。川瀬祭りでは他の地区の友達と、綺麗な着物を着込んで、手に扇子を持ちながら、山車の正面に立って「オーリヤーイ、オーリヤーイ」と山車の引き手達を激励する様子を見ながら、このこともうらやましく思っていた。いまの中村は山車を持っていると弟の久雄が言う。

中村の家の近くの表通りの角に「大増」という割烹旅館があって、よく遊びに行った。蓄音機があったからだ。どんな音楽を聴いていたのか、聴いていたおばさんが誰だったのか覚えていないが、ラジオがやっと普及し、食糧難の時代に蓄音機があったのだから、大増は裕福であったのだろう。表通りに面した部屋の南側で、蓄音機から聞こえる音楽を聴いた。大増茶屋に限らず、この頃は若い男は、皆戦争に取られて帰てこなかったから、大増茶屋にも跡継ぎがいなかったのだ



川瀬祭り

ろう。よく遊びに行く私に白羽の矢を立てて「養子に欲しい。来てくれれば大学まで行かせてあげる」と両親を通して私に言ってきた。私は両親と兄弟から離れるのが嫌だったから、「行かない」といった。母も姉もそれからずっと、この類の話になると、私のことを、素直な子だから養子に向いているという。

私は小学3年の三学期に秩父町立秩父第二小学校に転校した。そこにはガキ大将がいた。勉強がよくできて、友達を統率できる子だ。転校してきた私をその子が遊びに誘った。わがままな私は断った。「ふん、小菅君は遊ばないんだって」と言ったきり、その後一切、仲間に入れてくれなかった。淋しかったしつらかった。短い三学期で助かった。4年生になってクラス替えがあって、そのガキ大将とは別のクラスになったのだ。その子は私と違って、頭もよく運動能力も抜群で、中学校の頃はサッカー部の部長だった。秩父市立秩父第二中学校サッカー部は大きな大会で優勝している。

4. 小学4年生

運動会と独唱

4年生になった。根岸とよ先生という中年の女の先生が担任だった。宇井先生と同じく母の友達である。私は音楽や演劇によく選ばれる。転校前にも劇の主演に選ばれた。転校してからも小学3年の時に「よびかけ」というスタイルの演劇の主演をつとめた。4年生の運動会で、根岸とよ先生の意見で、同じ学年の女の子のダンスにあわせて、何と!私がマイクrophonを前に立てて、独唱させられた。こればかりは、その場から逃げ出したかったが、ナイーブな私は担任の先生のご意向にさからえなかった。こんなことで男の子達と仲良く遊んでもらえるわけがない。男の友達もいたが、いつも一人か二人だった。活発な男子は、私を相手にしな



3年生の時の学芸会 前列中央が私

い。まして、女の子は小学4年ともなれば、もうすでに男の子とは遊ばない。私は小学4年から高等学校に入るまでの間、友達の少ない日々となった。

小学3年の三学期に、野坂に引っ越しした。南玄関で、すぐに廊下がある。部屋は南廊下、北廊下に囲まれて二間続きの寝室が西側にある。中廊下を挟んだ東側、玄関廊下の奥に七畳半の居間、居間の奥に一段低いコンクリートの台所がある。トイレは北廊下の北西角にあった。野坂の家には台所の北側に風呂場と物置が別棟でついていた。竈は鋳物で、風呂釜も鋳物で、よく穴が開き、そのうちに銅釜と檜の風呂に変わった。鋳物の竈が、火力の強い石油に変わり母が喜んだ。これで飯炊きで竈についている手間がはぶかれた。荒川に近い中村から、羊山公園に近い野坂に移った。羊山には秋にススキがたなびく。野坂の家には紫色の花をつける十五夜花がよく咲いた。十五夜の晩には羊山からススキを採ってきて、庭に咲いた十五夜花を添えて、十五夜団子を食べた。

夜祭り

野坂の家は秩父夜祭りの仕掛け花火がよく見えるところにある。秩父の冬は寒い。おまけに私は寒がりだ。夜祭りの仕掛け花火は、夜中の12時頃に行われていた。しんと冷え込む秩父の真冬の夜に、膝頭をガクガクさせながら、美しい仕掛け花火や打ち上げ花火を眺めた。秩父夜祭りの日、暗くなる前には、父と神社に出かけた。神楽殿でお神楽を見た。天照大神や八岐大蛇や豊作を祝う踊りやひよっとこ踊りを観た。私は神楽囃子が大好きだった。なかでも「岡崎」が活気があって覚えやすかった。父は横笛を持っていて、よく吹いて聞かせてくれた。輝くようないい音色で、飾りをたくさん入れた音形で、玄人はだしに吹いた。夜になると山車のぼんぼりに灯がともされて、町中に引き回される。山車では、はらわたの底に響く秩父屋台囃子が打ち鳴らされ、人々が後をついて歩く。山車の美しさ、勇壮な祭り

囃子、山車を見上げる人達の表情が子供の頃の脳裏に刻まれている。

正月と七夕

お正月には、神棚にお飾りをした。我が家では、兄が主にこういう事をやった。「ますます（鱒々）代々（橙々）喜こんぶ（昆布）、くり（栗）まわり（毬）をよくして、かき（柿）いれる」というのが正月の神棚にあげる品々だと姉の賀子が教えてくれた。鱒ではなく塩鮭だ。栗・毬・柿（干し柿）に、やりくり上手と、かき入れの願いを込めているのだろうか。毬とは、鏡餅のことかも知れない。春の七草や秋の七草を詠った短歌なら、すべてが草の名前だからよくわかる。七夕になると、街の中心街が、美しく立派な七夕飾りをするようになった。太くて大きい竹竿に、七色の七夕飾りがついている。父に連れられて、弟の久雄と一緒に見に出かけた。帰り道に秩父神社の近くにある食堂によって、ステンレス製の皿にのせられたアイスクリームを食べた。冷たくて、甘くて美味しかった。以来数年間、これが父と弟と私の年中行事になった。



夜祭り

父に連れられて、弟の久雄と一緒に見に出かけた。帰り道に秩父神社の近くにある食堂によって、ステンレス製の皿にのせられたアイスクリームを食べた。冷たくて、甘くて美味しかった。以来数年間、これが父と弟と私の年中行事になった。

5. 小学5～6年生

独唱コンクール

小学5・6年の担任は飯塚先生という男の先生だった。5年生の時に独唱コンクールが秩父郡の皆野町で行われた。各学年1名ずつ選ばれて、私は5年生で出場して、「こいのぼり」を歌った。予選は通過したが、本選で伴奏者の2番が急にゆっくりになったので、調子が上がらずに上位入賞を逃してしまった。

遊び

私は殆ど勉強しなかった。授業時間に先生から教わったことしか覚えられない。家にいるときには、羊山に行ったり、羊山にある姿池で遊んだり、荒川に行ったりして遊んだ。羊山では山のあちこちを歩き回り、ときには武甲山の麓まで歩いていった。姿池では鮒を釣った。ボートに乗って漕ぎ方を覚えた。荒川では平たい石を投げて、バウンドさせて、向こう岸まで届かせるコツを覚えたり、川泳ぎをして遊んだ。

微熱

真夏に私はよく微熱を出して、寝かされていた。母が額に手を当てて、「熱があるから寝てなさい」という。医者が診ても微熱があって、寝てた方が良くという。熱が下がると、夏休みはもう何日も残っていなかった。原因は判らない。兄がどうしたんだよ。なんで寝てるんだよと聞かすが、当の私が、何故寝かされてるのか分からなかった。

お稽古ごと

お稽古ごとにもいろいろやらされた。日本美術展覧会にすべて入選し、特選をとって無鑑査だった書道家の父が、先ず私に習字をやらせた。習字の腕前が伸びれば、私も父に可愛がられたろうが、乳飲み子の時から父に対する恐怖心を植え付けられた私に、父が教える習字が上達するわけがない。父は、どんなに教えても言うとおりに書かない私に業を煮やして「お前はダメだ」と早々に諦めた。長足の進歩を遂げた弟の久雄は、父の後を継いで、今はやはり日本美術展覧会に入選する書道家である。他にそろばんや絵画の塾通いをした。足し算、引き算、かけ算、割り算を計算するには、そろばん感覚が必要だと言うことで、行かされたのだと思うが、その程度は出来ても、小学1年から算数が嫌いな私が、そろばんが上達するわけがないのだが、片道5km位ある道のりを週3回、数年間通い通した精神力は、今なっていて生かされていると感じている。絵も兄ほどには上達しなかった。せいぜい展覧会で金賞や銀賞を貼られる程度だった。小学6年の時に写生大会があって、私は賞に入らなかったが、

後に日本美術展覧会入選歴を経て、特選を2回とり、招待作家の洋画家になった兄は、このときも一人、油絵を描いて文句なしの一番だった。そんなこんなで、私は絵の塾には行かなくなった。心の中では、私はピアノを習いたかった。しかし練習できる環境にない。家にはピアノはおろか、オルガンもない。はなから諦めて黙っていた。